

ルバナ湖のほとりで

本年 4 月に、JICA プロ形調査団員としてバルト三国の一つであるラトヴィアを訪問する機会を得た。ラトヴィアはバルト海の東岸に立地しており、海洋性気候の影響により高緯度の割には比較的温暖な気候に恵まれている。首都リーガの旧市街はユネスコの世界遺産にも指定されており、かつては「バルトのパリ」と呼ばれた魅力的な町並みが残されている。



リーガの旧市街

ラトヴィア最大の湖であるルバナ湖は首都リーガから 170 程東の内陸に位置しており、4 月はじめに訪れた時には湖はまだ氷に覆われていた。周辺には森林や湿原、農耕地や養殖池といった各種ビオトープがモザイク状に分布しており、複雑な生態系を作り上げている。このため、地域の生物多様性が高く、数々の貴重な動植物が生息している。なかでも、鳥類の種類ではラトヴィアで最も豊富な所となっていて、この時期には 2,000 羽の白鳥が湖畔で羽を休めていた。湖から流れ出す川の氾濫原草地では、オジロワシやカラフトワシの姿も認められた。また、アカマツやシラカバの林が目につくなかで、この時期はヤナギの芽吹きが素晴らしい。市場にも芽吹いたヤナギの枝が束ねて売られており、お供え物として使われているようであった。そして、なんと目につくのはオークと呼ばれるヨーロッパナラの大木で、その特徴的な姿はあちらこちらで地域のランドマークとなっている。長い冬が終わって太陽の光が眩しくなる季節、子供達は連れ立って川に水遊びに繰り出す。そういう時、決まってどこからともなく、お母さんの声が聞こえてくる。「まだまだ、川の水は冷たいよ！水遊びは、オークの木が緑になってからにしてください！」

一見のどかに見えるこうした湿地帯も、旧ソ連時代には化学肥料・農薬の多投による農業や高密度の養殖が地域の環境に深刻な影響を与えていたという。しかし、ソ連からの独立後、環バルト海協力の活性化や欧州統合の動きの中で、ラトヴィアでは北欧諸国の援助による多くの環境汚染対策プロジェクトが推進されている。また、旧ソ連時代の反省に立って、かけがえのない自然を保全するための NGO の活動も活性化されてきている。前述の母親の言葉から感じられる季節感が失われないような自然を、いつまでも残し続けたいものである。

(ラトヴィアにて：大沼)



湖畔で羽を休める白鳥



早春のヤナギの芽吹き



オークとコウノトリ